

入選

「幻想郵便局」 堀川アサコ（講談社）

フードビジネス学科 長尾茉菜美

私たちは死んだ後どうなるのだろうか。少なくとも消えてしまうのではない。

物語は彼の世と此の世の境目にある不思議な郵便局、登天郵便局が舞台だ。主人公の安部アズサは、就職浪人中。「なりたいものになればいい」と、両親は言うが、なりたいものは特になく、同期の友達が当然のように踏み出した一歩を踏み出せないでいた。のんびりとした毎日を送っていたアズサに名指しでアルバイトの求人の連絡がきた。なんでも履歴書の特技欄が目にとまったのだという。しかしアズサが履歴書の特技欄に書いたのは「探し物」とだけ。職場は山のとっぺんの聞いたこともない郵便局。よくも考えず仕事を受けることにしたアズサは、すぐに後悔した。登天郵便局は死んだ人も生きた人も訪れる不思議な郵便局だった。ここを訪れる人は個性豊かで少しおかしい。そして皆、どこことなく哀しみを湛えている。こんな所でやっていけるのか、アズサの中では不安ばかりが積もった。登天郵便局を訪れる人々（幽霊含め）がおこすいろいろな問題を一生懸命解決するアズサに自分を重ねながら読むと、ホラー、アクション、サスペンス、いろいろなジャンルを楽しめる。

登天郵便局に現れる幽霊は、とても元気で明るい。怨霊でさえどこことなく明るいのだ。ホラーに出てくる幽霊のイメージとは大違いだと思わないか。この世界の幽霊は生きた人間とほとんど変わらない。手紙をだし、記帳をし、ビールを飲み、ラーメンをすする。幽霊が身近なものに感じられる。つまり「死」がとても近いのだ。この小説を読んで「死」を身近に感じてほしい。そして、生きることを意味をわかってもらいたい。

私は、最後の後書きまで読んでもらいたいと思っている。作者がどんな思いでこの本をかいていたのか。どうして幻想郵便局を書くことにしたのか。後書きを読んだ後にもう一度読み返すと、物語を違った視線で見ることができる。